

災害救助・支援活動で亡くなったかたの冥福を祈ります

自治体労働者4人目の自殺

3月9日の岩手日報は、「大船渡市派遣の男性技師が自殺か 県の任期付き職員」の見出し記事を書きました。

大船渡市は8日、県から派遣されていた30代の男性土木技師が宿舎の仮設住宅で死亡していたが、現場の状況から自殺とみていると発表しました。市と県は仕事上の悩みなどを確認しておらず、原因は分からないといいます。市と県によると、男性は2013年4月に県が採用し同市に派遣。市内の仮設住宅に1人暮らしで、任期は3月末まででした。7日朝、出勤せず連絡も取れないため訪ねた同僚が発見しました。

勤務状況に問題はなく、最近の残業時間は毎月2、3時間で、土、日曜は休んでいました。市は派遣職員に対し毎年アンケートなどを実施。男性に特に問題はなかったといいます。県も派遣職員に年3回の面談を実施しており、男性は「課題はあるが、仕事は順調に進んでいる」と話していたといいます。

この報道からだけでは細かいことは分かりません。推測を交えながら検討してみます。

東日本大震災の復興に従事した自治体労働者の自殺は、今回亡くなった方で4人です。

いずれも自殺に至ったのは土・日曜日またはお正月です。張りつめていた意識が少し解放された時です。

被災地では震災直後から土木関連職員が不足し、全国の自治体にその経験がある職員の派遣を要請してきました。しかし行政改革が進められたなかで各自治体は職員そのものにゆとりがありません。それでも無理をして要請に応じています。被災地の自治体は共同で全国紙に年数回、3年有期の職員募集の広告を載せています。それでも不足した状態が続いています。オリンピック事業が土木関連の人材を高賃金で吸収し続けています。

男性は、30代の男性土木技師で、2013年4月に県が採用し同市に派遣とあります。おそらくこれに応募したのではないのでしょうか。公務労働の経験はあったのでしょうか。コミュニケーションはちゃんと取れていたのでしょうか。

忙しい中でも労わり合い、“精神的ゆとり”を

復興事業は5年が過ぎても道半ばです。自治体職員を抜きにして復興はありません。

「これまで経験したことがない業務が発生し、人員不足の中で1人で何役もこなさなければならぬこともあります。しかし無制限の過重労働が続き、今後も続くことが予想され

るならばなおさら、各自が長期に関われる心身を確保するために定期的休養が必要です。自分を不可欠の人材であると捉え、責任もって任務を達成しようという熱意を持つならば、逆にいま無理をしてリタイアすることは全体に対する無責任になることを自覚する必要があります。支援者は、1人で復興活動に従事しているわけではありません。

お互いが業務を理解し合い、忙しい中でも労わり合い、“精神的ゆとり”と休息を保障し合うことが必要です。そうすると異常の予防・早期発見に繋がります。」(『惨事ストレス 救援者の“心のケア”』)

自殺は、長時間労働、過重労働だけが原因ではありません。

業務途中の定期的な一斉休憩などで、業務外の話題に花を咲かせて交流することも大切です。自分の業務の必要性を確認できないまま遂行を続けるのはストレスです。先が見えないと無力感に襲われます。上司は朝礼などで事業の進捗状況を報告し、職員が自分の役割と責務を確認できるようにする必要があります。

自衛隊員の自殺

東日本大震災震災の救援者・支援者の自殺は自治体労働者だけではありません。

真山仁の小説『海は見えるか』(幻冬舎)が刊行されました。『そして、星の輝く夜がくる』の続編です。被災地の小学校が舞台で、主人公は神戸から派遣された小学校の先生です。先生は、阪神淡路大震災で妻と娘を亡くしています。

担任した女子児童のみなみがふさいでいます。理由は、震災直後に親切にしてくれた自衛隊員と1年間近くメールを交換していたのが途絶えてしまいます。

先生は、つてを使いながら自衛隊員の消息を探り、駐屯地を訪ねます。

『それで、小野寺さん(先生)が捜しておられるのは、このお嬢さんとメールの交換をしていた宮坂竜彦ですな』

『いらっしゃいますか』

『おりました』

過去形か……。

『実は、亡くなりました』

なんやて！

『事故ですか』

小西(隊長)が辛そうに唇を噛んでいる。その様子で、小野寺は事情を察してしまった。『死因については個人の情報なので、規則ではお答えできません。ただ、今日小野寺さんがいらっしゃる旨をご遺族にお伝えしたところ、きちんと話して欲しいと言われましたので、特別にお答えします。我々としては、小野寺さんの胸の中だけにしまって戴けるとありがたいのですが』

ここは頷くしかない。

『自室で首を吊って死んでいるのが見つかりました。おそらく、自殺とみられます』

やっぱり……、なんということや。この現実を俺はみなみ（女子児童）にどう伝えたらええんやろう……。

『ちなみにいつのことですか』

『本年（2012年）2月26日の早朝です』

みなみ宛に最後のメールが送信されたのは2月の終わり頃だった。

——眠れないし、毎日が辛いつて言ったきり、連絡が取れなくなっているのって心配じゃないですか。

『原因は分かっているのですか』

小西は静かに首を振った。

『文通では、悪夢で眠れないと打ち明けておられたようです』

『震災の影響かどうかは、分かりません。そうであってほしくないと思っています。しかし』

小西が言葉に詰まった。それを柏原（副師団長）が受けた。

『宮坂が発災直後から遠間市を拠点に、人命救助や瓦礫の撤去およびご遺体の搬送と洗浄を行っていたのはご存じですか』

『ええ』

『我々は、発災直後から隊員の心のケアには最大の注意を払ってきました。自衛隊員であっても、ご遺体を目にする経験はほとんどありません。特に宮坂はまだ21歳の若者で、災害救助活動も始めてでした。その彼に遺体の搬送や洗浄の作業は酷だったのかもしれない』

21歳の若者が、来る日も来る日も遺体を洗う日々とは……。

だが、誰かがやらねばならない仕事でもある。

『本来、洗浄作業については、5日以上は続けて任務に当たらないように義務づけています。しかも宮坂のような若手は避けていたのですが、彼が強く志願したものですから』

志願した？ 百戦練磨のベテランでも逃げだしたい過酷な仕事なのに。

『そういう男でした。辛いことを率先して実行する——、それが己を強くすると考えていました』

若さゆえのストイック自己鍛錬か。それとも、被災地の惨状を見て何かやらずにはいられないと思ったのだろうか。

『ご遺体の洗浄作業は辛い作業です。でも、我々はご遺体を洗う時、生きている方として接しようとして決めていました。きれいに体を洗ってご家族と会えるようにする。ベテランの隊員の中には、洗浄中ずっとご遺体に話しかけていた者もおります』

それも任務なのか——。

『だから心のケアには配慮していたつもりです。毎晩必ず隊員が車座になって“解除ミーティング”を行い、その日洗浄したご遺体のことや自分が考えたこと、辛かったことを話

したりもしておりました』

解除ミーティングというのは、『悲惨な状況の体験や感情を同じ現場で活動したグループで話し合い、共有する』ミーティングを指すらしい。これは、その日の作業を終え、宿営地に帰隊した直後に参加することが義務付けられている。

『宮坂も参加しておりましたが、いつもしっかりとした口調で作業について語っていました』

1日の悲惨な体験をしっかりとした口調で話すって、どんなすごい奴かと一旦は感心した。だが、すぐに若者のやせ我慢を感じた。」

自衛隊は教訓を活かしていない

本の最後に作者の「謝辞」が載っています。名前を記すと差し障る方からも支援をもらっています。これから察すると取り上げられていることは実話だと思われます。

そのことを踏まえて検討すると、自衛隊の対応は間違いがあります。

「我々のご遺体を洗う時、生きている方として接しようと決めていました。」同じことを震災直後に被災地を訪れた防衛大臣も訓示していました。これでは体調を崩してしまいます。

警察では、敢えていうなら、遺体は証拠品として大切に扱います。

「彼が強く志願したものですから」。非現実的な状況を冷静に見つめていたとしても、その冷静事態が異常です。異常がなかったということではありません。意識的に日常性を取り戻す作業を行わないと異常が日常を支配して抜け出せなくなります。日常性を取り戻す作業の1つがグループの話し合いです。

「死因については個人の情報なので、規則ではお答えできません。」「ご遺族にお伝えしたところ、きちんと話して欲しいと言われましたので、特別にお答えします。」東日本大震災では、2名の自衛隊員の自殺が明らかになっています。もっといると思われます。

追悼とは、死者の沈黙の言葉を社会に伝えること

精神科医の野田正彰さんは、1987年4月に国鉄が分割民営化される過程で職員の自殺が急増した原因について調査をしています。

「1人の人間の死は、あくまで個別的なものである。しかし孤立させ、自分の命を絶つ決意をさせたのは社会の問題である。自殺者は自殺という行為のみを選び、自分の絶望の意味を周囲の人や社会に伝えることはできないのである。死者はひとり向う岸に行ったのであるが、言葉をもたなかった死者のメッセージを読みとるのは私たちの義務である。

死んだ者への本当の追悼は、死者の沈黙の言葉を読みとって、それを社会に伝えることにある。……

自殺はプライバシーにふれる、という。だが、死者のメッセージをプライバシーで隠そうとする姿勢は、死者を忘れるための手段にしかない。そして、自殺者は続くのである。」(野田正彰著『生きがいのシェアリング 産業構造転換期の勤労意欲』中公新書刊)

杜撰な原因分類

「ところで、国鉄は自殺の原因別内訳を公表している。これを中心となって担当したのは職員局のM調査役であり、彼は『自殺そのものの調査ではなく、自殺の要因が職場環境にあるかないかを判定する限定的な調査』を行ったという。私は、自殺未遂者の治療にあたったこともない非専門家が自殺を総合的に分析する努力もせずに、『職場に原因があるかどうか判断できる』と断言するのは、いかにも官（国鉄）らしいと思った。これは病理解剖を死者のプライバシーにふれるとあって、心臓の切開だけに限定するようなものである。身体全体を見なくては、病理は見えてこない。否。このたとえよりまだ悪いといえよう。

推定される原因 (国鉄職員局厚生課)	国鉄自殺者数		国民の自殺者の原因別 (警察庁防犯課)	
	1985年	86(10.27現在)	1985年	
精神神経疾患等(ノイローゼ、うつ病等)	11 (24.4%)	16 (38.1%)	17.3%	アルコール症・精神疾患
家庭不和	7 (15.6%)	0	10.2%	家庭問題
病気苦	2 (4.4%)	2 (4.8%)	42.4%	病苦等
金銭苦	2 (4.4%)	5 (11.9%)	11.4%	経済生活問題
その他(失恋、交通事故、看病疲れ等)	23 (51.1%)	19 (45.2%)	4.7%	勤務問題
計	45人	42人	3.5%	男女関係
			1.0%	学校問題
			5.9%	その他
			3.4%	不詳
				計23,599人

表4 自殺の原因・動機別内訳

そんな彼らの分類によると、表4の左にあるごとく、自殺の原因（1986年）はほとんど精神疾患（38%）か、その他（45%）ということになる。

ここで、国鉄の原因別と、警察庁の国民の自殺者の原因別（表4の右）を比較してみよう。第一に奇妙なのは、警察庁発表にある勤労問題の欄がそもそも国鉄側の表にはないこと

である。これは無意識による抑圧なのか、意識された禁圧なのだろうか。（『生きがいのシェアリング 産業構造転換期の勤労意欲』）

「官」ではこのようなデータ作成が行われていたようです。現在の厚労省のメンタルヘルス対策も似たようなものです。

もしかしたら自衛隊の東日本大震災派遣や海外派兵における原因分析も似たようなものではないでしょうか。だから発表数が小さいのではないのでしょうか。だとしたら教訓が活かされません。犠牲者をこれ以上増やしてはいけません。亡くなった方が浮かばれません。

3月11日、あらためて被災して生き残った者たちは災害救助活動、支援活動中に亡くなった方がた、その後に亡くなった方がたの冥福を祈るとともに感謝の思いを伝えたいと思います。